

大永六年（一五二六）十一月。扇谷上杉朝興は武蔵・相模と、北条方を攻め続け、玉縄城へと迫っていた。

玉縄城は北鎌倉の玄関口にあたる玉縄の地にあり、かつて三浦氏攻略のために伊勢宗瑞（北条早雲）が縄張りした城である。ここは外堀が柏尾川に連結した造りになっていることから、相模湾からの舟が直接乗り入れることができるようになっていた。川であり、堀であり、運河というわけだ。この構造形態は里見氏という稲村城のそれに近いもので、北条水軍にとつては、重要な海上拠点のひとつといえた。

ここを単独で攻める朝興の意図に、恐らく城主・北条左馬助氏は、大いに首を傾げたことだろう。

「扇谷上杉」ごとき、用心するに値しない。しかし、小弓公方と上総の軍勢がこれに加勢しないとも限らぬ。城兵は見張りを怠らぬよう」

氏は城内にそう下知した。

北条氏は伊勢宗瑞の次男で、兄の氏綱と異なり、慎重に慎重を重ねるような性格の人物である。こういう気質の将は、野戦より、むしろこういう拠点防衛にこそ、格好の人材といえよう。

更にいえば、古きを尊び慣例に縛られて、何かと新しきことに難色を示すような鎌倉を掌握するうえで、この手の合理的な性格の人物は、うってつけなのである。なぜなら、合理主義者は、決して情に流されることもない。煮ても焼いても食えないような、僧籍を相手にするには「これ以上の適材はいない」

のだと、氏綱は弟の実力を高く買っていた。

氏は上杉勢襲来を急ぎ小田原へ報せた。

と同時に、城内へは敵の攻めに応じることなく、徹底した籠城策を選択し、末端まで命令を徹した。やがて、小田原から新たな情報が届いた。この上杉勢に小弓公方や真里谷勢の加勢は見受けられないようだ。

こちらへの備えは、千葉氏や江戸城で十分に対処できる。

（たかが扇谷上杉が賢しく玉縄に迫るのは、単に各地転戦のひとつであろうか）

氏は思案した。

何やら胸騒ぎがしてならなかった。

金谷城下の湊では、里見水軍が出撃の準備を急いでいた。陣頭指揮を執るのは、里見実堯である。

「左衛門佐さま、あれを」

傍らの兵が東寄りの海を指した。里見の紋を帆に染めた舟が数隻、金谷湊をめざしてくる。

「ほほう、殿のお出ましたわ」

実堯は舟を一瞥した。

稲村城に係留された六挺櫓の舟である。実際に運河を用いて、ここまで来たのだろう。義豊の舟だけは八挺櫓だ。途中、岡本湊で乗り換えに相違ない。

師走の江戸湾は波が強くなる。

これは内陸から吹き流れてくる北風によるものだ。気流が捲いてくるのか解らぬが、鋸山から吹き下ろす風も冷たい。この鋸山は上総国と安房国の国境にあたる。

久留里までおおよそを掌握する実堯は、里見家にあつて、唯一、上総国に精通する人物といえよう。それだけに世間にも聡い。

在地の有難味をこの機に義豊へ叩き込もうというのが、このときの実堯の思惑だった。

「叔父上、遅うなった」

蒼い顔で義豊が叫んだ。

「稲村より、遠路御苦労にござる」

「これほど舟が揺れるとは思わなんだ、おかげで大きい舟に乗り換えたぞ」

やはり八挺櫓の意味は、そういうことだったのかと、実堯は苦笑した。波に不慣れた義豊には、六挺櫓は辛いところだろう。

「末端の兵は日頃より、このような場で合戦に臨んでおられます。その労を肌で識って頂くだけでも、皆の者は報われましよう」

義豊は返事をしなかった。

「しかし、こうして見ると、三浦の城ヶ島までよう見える。稲村城からは好天の折に小さく映

えるが、おお、富士の嶺まで見事なものじゃ」
いつになく義豊は雄弁だ。非日常の出来事ゆ
えであるう。

「これより江戸内海を渡って鎌倉へ至ります。
お疲れでござりましょう。支度が整うまでは、
陣屋にておくつろぎを」

実堯は傍らの正木通綱に案内を任せた。

十
十
十

鎌倉炎上(1)

夢酔 藤山